



Title	花屋玉栄詠『源氏物語卷名和歌』（解題と翻刻）
Author(s)	伊井, 春樹
Citation	詞林. 1989, 5, p. 30-33
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67268
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

花屋玉栄詠『源氏物語卷名和歌』

（解題と翻刻）

伊井 春樹

玉栄は、『顯伝明名録』に「玉栄 南都比丘尼慶福院近衛植家公息女（厄）」とあり、『花屋抄』を文禄三年（一五九四）

の六十九歳に、『玉栄集』を慶長七年（一六〇二）の七十七歳に執筆したことなどは、その『源氏物語』研究の様相とともにすでに述べたことがある（『源語研究資料集』解題、碧冲洞叢書第八十七輯）。父の植家をはじめ、近衛家は『源氏物語』と深いかわりがあり、そういった影響のもとにあったことは否めないが、また女性の立場から独自の解釈もしており、さらにスペンサーコレクションに蔵される『源氏物語絵巻』六巻は玉栄による天文二十三年（一五五四）の作とされる（マガレット・チャイルス「スペンサーコレクション蔵『源氏物語絵巻』」『国語国文』昭和五十六年七月）。これまで玉栄の動向は晩年しか明らかでなかったが、この絵巻の存在によって若二十九歳ですでに『源氏物語』とかわりがあったことが知られるようになった。しかも、五十四巻の絵画化という絵との関係もある

るわけで、これは当時の絵巻や色紙画帖の場面の問題ともからみ、興味は尽きない。

ここで、もう一つ玉栄の作品を紹介し、彼女の業績に加えたく思う。陽明文庫の文書（七六五七四）に納められている、素紙に書写されて装丁などされないまま巻かれた『源氏物語卷名和歌』（仮題）で、これには五十四帖五十四首の卷名歌が見える。一首二行書き、頭部に巻序が記される。巻末には、

すぢなき事共にて心にまかせまいらせ候て候へども、書うつしてまいらせ候

天正十七菊月十九日 花屋玉栄六十四才

とあり、天正十七年（一五八九）九月十九日に六十四歳の玉栄が、人の求めにより書写したことが知られる。すると、この卷名歌を詠んだのは、それ以前であろうか。

永青文庫蔵『古筆手鑑』に「慶福院殿玉栄」として、

篝火のほかけほのかにゆふやみの琴をまくらのよひのうた

、ね

野分ふく朝に花の色／＼をおもひくらへし秋の夕霧

と一首一行書きによる二首の歌切が押されており、これは『源氏物語』の「篝火」と「野分」の巻名歌であるとわかる。しかも、本稿に翻刻した二巻と、漢字かなづかいとは異なるものの、筆跡と歌の内容はまったく一致する。これなども、依頼されて書写した巻名歌が、切断されて手鑑に押されるにいたったのであろう。ただ、今のところ玉栄の巻名歌断簡は、右の一葉しか見いだしていない。

web公開に際し、
翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました